

## 解答

□

問一 本当は女性の行動のなかにも男性的なものがふくまれていたのだが、その男性的なものを消してしまうという「ウソ」の表現をすることで、女性らしさが強調されるということ。

問二

(1) 前のページでは、お地蔵さんが凍り付いてしまうほどの猛吹雪であることを強調するために、お爺さんのからだを斜めにし、雪を角のある鋭い感じに描き、お地蔵さんの顔も厳しい表情に描いている。後のページでは、心優しいお爺さんがお地蔵さんに笠をかぶせてあげたなごやかな場面であることを強調するために、雪を丸く大きく描き、お地蔵さんの顔もおだやかに描かれている。

(2) 物語絵本の表現とは科学的に正しいかどうかを伝えているのではなく、その本でいちばん伝えたい内容や感動をわかりやすく伝えるために多少誇張してでも強調して表現するものだから。

問三

ア

問四 描かれる馬は足をそろえて飛ぶようにしているが、それが「走る」というイメージの核心をついているので、「真実」と感じられる。しかし、写真で見る「事実」は足を一本ひきずっているように見え、「走る」というイメージに合わないということ。

問五

ア × イ × ウ ○ エ × オ ×

□

問一 三五郎をきり殺そうとねらっていることを、女中に気づかれないようにするため。

問二

覚悟なく不意打ちにされて、逃げまどい苦しみながら死んでいくような姿。

問三

エ

問四 逃げ隠れしようとしたら殺そうと思ったのに、三五郎は逃げるためではなく、ただ石をしらべるためにかわらに降りたのだとわかり、緊張がゆるんでしまったから。

問五

三五郎のあとを追いついたときは、今まで殿さまの命令でできてきたうちの一人でもしかなかったが、自分が殺されるかもしれないと感じていながらも石をしらべずにはいられないという三五郎の石工としてのすがたを目にしたとき、一人の人間として尊敬の念を抱き、とてもきれいな思うようになった。

問六

川には豊かな水があった。

□

問一 最後のひとつになり、心細くさびしくなってしまったが、そんな自分の弱さを認めたくないという自尊心から、少しだけ強がっている。

問二

居直ったところで他に影響を与えられるわけではないとわかっているが、何かしなないではいられないほど、心細かったことを強調している。

問三

存在感がうすくなり、どうしていいかわからなくなったが、やはりだれかに興味を持ってほしいので、不安に負けないようにと意地になって何かに反発しようとしている。

## 解説

□

出典は、赤羽末吉「私の絵本ろん」。絵のリアリズムは写真のリアリズムと違うということ、いくつかの例をあげながら説明し、写真は事実だが、絵はそれよりも真実であると導いていく文章です。文章だけでなく、三枚の絵を参考にして考えさせるといふ新しいタイプの問題も出題されました。

問一

浮世絵では女性の手足を実際より小さく描くことを例にあげて、女性のやさしさを表すための工夫であると述べています。また、次の段落では歌舞伎の女形を例にあげて、女性の行動のなかにも男性的なものがふくまれていて、その男性的なものを消して、女性的なエキスだけをみせるのが女形であると述べています。つまり、男性的なものを消すというウソの表現をすることにより、いっそう女性的にみえることと説明しているのです。

問二

本文・設問の後に用意された二枚の絵を参考にして考える問題です。筆者は「かさじぞう」の絵本を例にあげて、前のページ（吹雪の中を雪をかぶったお地蔵さんの方へ歩いて行くお爺さんの絵）と後のページ（お地蔵様に傘をかぶせている絵）の表現の違いを説明しています。

(1) 前のページで注目するのは、お爺さんのからだはげしい吹雪に逆らうように斜めになっていること、降る雪ががたがたしている感じであること、お地蔵さんの顔がすっかり悲しそうにみえることなどです。後のページでは、雪が丸くおだやかな感じに見えること、傘をかぶせてもらったお地蔵さんの顔がやさしく見えることに注目しましょう。

(2) 物語絵本では作者の伝えたいことや感動を、絵をとおしてわかりやすく伝える必要があります。そのために科学的に正しいかどうかよりも、情景や気持ち伝えることを優先するわけです。正確な描写より、誇張した描写の方が有効なわけです。

問三 ここでは、直前の「気象的に見ても、山の天気は瞬時に変わることもあって」をうけて、「問題にならない」といっています。また傍線③の「問題にならない」の問題は、三行前の「この問題」を指していて、この指示語の指す内容は、直前の「吹雪がそんなにすぐやむはまらない」ということなので、「気象」の変化についてであることがわかります。山の天気は瞬時に変わるの、全然おかしくないと言者は主張しているのです。

問四 問二と同じように、絵を参考にして「馬」が走る時の四本の足のようすを用いて「事実と真実の差」を説明させる問題です。写真で見ると走っている馬の四本の足は、一本の足を引きずっているようなへんな形だと述べられています。それに対して絵で見る馬の足は鹿のように足をそろえて飛ぶように描かれています。これはウソなのだが、真実、馬が走っているように見えると筆者は述べています。写真は事実だが走っているように見え、絵はウソだが馬が疾走しているように見えるということです。事実より真実を伝えられるのが絵だ、といっているのです。

問五 アは「力太郎などは、グロブのような手をかく」とあるので×。イは「女性的なエキスだけでみせるのが女形で、より女性的に思える」とあるので×。ウは「かさじぞう」の例をあげて説明されているので○。エは写真で見える馬の足はへんな形だと述べられているので×。オは文中に「事実からははなれるが、はなれることによって、そのもっている核心をつき」とは書いてあるが、「実物からはなればはなれるほど似せることができる」というのは、ありえないことなので×。

㊦ 出典は、今西祐行「肥後の石工」。肥後の石工・岩永三五郎を暗殺しようとする刺客でありながら、三五郎の人徳にふれ、なかなか殺すことのできない「さむらい」の葛藤を描いた場面です。

問一 傍線①の後に「女中がでていくと、ふたりはながいあいだおしだまってむかいあった」「さむらいはしきりと酒のみつづける」とあることから、二人が険悪な関係にあることがわかります。「さむらい」は、三五郎の命をねらっていることを女中に気づかれないようにわざと親しげにふるまっているのです。

問二 三五郎は「不意打ち」にあつて、ぶざまな死にざまを見せたくないようです。覚悟の上で切られるのなら逃げ惑ったり苦しんだりせずに、少しはきれいに死ねると思ったのです。

問三 「まく」とは、「尾行をまく」のように使われ、後をつけてきた人をうまくはぐれさせる（見うしなわせる）ことです。

問四 傍線④の前「自分からにげるためではなく、石をしらべるためだったのかとおもう」という「さむらい」の心理描写から考えます。「さむらい」は、追っている相手がにげかくれしようとする、ためらいなく切るといっています。三五郎が、にげるためではなく石を調べるために河原におりていったことを知った「さむらい」は、切り殺そうという気をそがれてしまったのです。

問五 最初は、殿さまの命令で三五郎の命をねらうことに迷いのなかった「さむらい」でした。しかし、あとをつけられ命をねらわれているとわかつている三五郎が、逃げようとせず、河原の石を調べるすがたを見て、石工として立派に生きていると、その人柄に心をうたれます。そして、へやの中で三五郎と話すうちに、その気持ちは尊敬の念へと高まっていったのです。

問六 漢字の書き取り問題です。一画ずつ、丁寧に楷書で書きましょう。最後の句点を忘れずに。

㊦ 詩の読解問題です。出典は、石原吉郎「居直りりんご」。

問一 「居直る」とは、「ひらきなわる」こと、「逃げ切れないとわかって、急にふてぶてしくなる」ことです。この詩の「りんご」は、ひとつだけ取り残されてさびしかったのでしょう。でも、それを認めるのがいやで、ちょっと強がっているのです。

問二 「それほど」を二回くり返す強調表現です。強調されているのは、「気がよわくて」と「こころ細かった」というりんごの気持ちです。居直ってもどうにもならないとわかっていても、そのままではいられないくらいさびしかったと訴えているのです。

問三 居直って見たものの、やはりさびしさに変わりはなく、どうしていいかわからなくなってしまうのでしょう。そこで、その不安に負けないように、もう一度悪あがきを試みたわけです。本当には居直ることのできない、意地張りの小心者のりんごのようです。